

書 評

武智秀夫 著

義肢装具とリハビリテーションの思想

大橋 正洋 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

本書の体裁は、B6版小型のペーパーバックである。ページを開くと、エジプト古代の壁面レリーフや中世の銅板画など、義肢・装具あるいは身体障害者を記録した歴史的な図版の数々が目に飛び込んでくる。巻末には、人権思想と技術の進歩を対比させたユニークな年表が掲載されている。一見して本書は、医学的解説書の範囲を超えていることが分かる。

著者の武智秀夫先生は、現在吉備高原リハセンター院長として多忙の毎日を過ごしておられる。先生は今までの35年間、整形外科医として肢体障害者の医療に携わってこられた。特に義肢および装具のエキスパートとして高名である。本書は、国際障害者年に医歯薬出版より発刊されたものに加筆し体裁を新たに出版された。このことから、本書の主題が先生にとって重要であることが分かる。

武智先生はエキスパートの視点で、歴史の中から興味深い事物や人物についてのエピソードを収集されている。考証は、古代インドの医学書やギリシャ神話から出発し、はるか現代に至っている。アンブロワーズ・パレ、ニコラス・アンドリーといった医学界の偉人、トマス・アクイナス、ロックといった思想界の偉人、ヒポクラテスのスカンヌムやゲッツ・フォン・ベルリヒンゲンの鉄の手といった歴史的機器、あるいはヴネルの肢体不自由児施設など、35年間の間に調べてこられた蘊蓄の数々が本書で披露されている。この本が執筆されるには、歴史を勉強する楽しみが先生の強い動機になっていたもの

と推察できる。日頃、テレビ番組など既成の情報を受け取ること惯れていた自分を振り返ってみると、興味のある情報を主体的に集めることが、はるかに楽しいものであると教えて頂けた気がする。

本書の主題はリハビリテーションの基本思想と障害を補填する技術の歴史についてである。では義肢・装具、あるいは障害者のことを考えるのに何故歴史観が必要かということだが、これについて先生は「あとがき」のなかでつぎのように述べておられる。「すべて物事は突然変異のように現れるものでなく、歴史的必然を経ることによって生まれる。(中略) 義肢・装具の技術も人権思想も現象的に捉えるのは容易だが、それらが生まれるに至った経緯を理解しなければ本当に身体障害者のリハビリテーションは行えない。」すなわち今後、障害者にどのように対応すべきかについては、テクノロジーの側面と人権思想が社会にどのように定着するかの両側面を考える必要がある。そして、それらの行く先を判断するには過去の歴史を無視して考えることはできない、ということであろう。

障害者がテーマの本ではあるが、武智先生は人権問題について堅苦しい主張を述べられているのではない。文章は平易で、面白いエピソードが多数記述されており、くつろいで読み通すことができる。時間をかけて良く準備されたもののほど、読みやすい本になるという好例である。

(B6 頁188 2,800円(税込) 1995 創造出版刊)